

自由通路 人とまちをつなぐ

鉄道は、多くの人の移動を支える身近な交通手段で、駅を中心に人が集まり、まちが発展してきた。一方で、線路が街中を横切っていることが人の移動を妨げることもある。

特に複数の路線が乗り入れる駅では、反対側に移動するのに時間がかかることも珍しくない。そこで、歩行者の不便解消を目的として、改札を通らずに駅の両側を行き来できる自由通路の整備が各地で進んでいる。

県内では桑名駅において、改札や駅機能を上部空間に集約した橋上駅舎とともに自由通路が2020年に整備された。JR・近鉄・養老鉄道の3社が乗り入れる桑名駅は、かつて駅の反対側に移動するには横断距離の長い踏切を通る必要があるなど、利便性や安全面で課題があった。

完成後は、小さな子どもや高齢者も安全に渡れるようになった。また、駅を挟んで東側の中心市街地と土地区画整理が進む西側の橋渡しとなり、まちに一体感をもたらしている。

津駅でも自由通路を整備する計画が動き始めた。津駅は鉄道の乗車人数だけでも1日に約1万9000人（23年度県統計書）が利用する。駅周辺の路線バスの乗降場は東西合わせて12カ所あり、乗り換える人も多い。

しかし、改札を通らず駅の反対側に行くには改札やバスの乗降場から離れた地下道を通るしかなく、不便を感じている人も多い。25年8月に津市が公表した「津駅周辺基盤整備の方向性（ビジョン）」では、まちの東西連携を担う自由通路の整備が計画されている。

通路の将来イメージにはベンチなどの滞留スペースも描かれており、交流の場としての役割も期待される。自由通路は移動をスムーズにするだけでなく、人の交流を生み、駅とまちをつなぐ役割も担う。

だが、それだけでまちが活性化するわけではない。津駅周辺では今後、駅前広場や道路を活用したにぎわいづくりも計画されている。

駅周辺が便利だけでなく心地よく過ごせる空間となり、自由通路から生まれる人の流れが、まちの活気へとつながってほしい。

（PPP/PFI事業部 研究員 宮原 壮大）